

芳地隆之
houchi takayuki

ぼくたちは
革命のなか
にいたただ
か

東留イ
ベ学テ
ルグイ
リラ
ンフ

BERLIN





芳地 隆之（ほうち たかゆき）

1962年（昭和37年）東京生まれ。香川県の県立観音寺第一高校を卒業。1981年中央大学文学部独文学科入学。

専攻はブレヒト演劇。大学卒業後、3年半のサラリーマン生活を経て1988年9月より東ベルリン・フンボルト大学ドイツ学科に留学。ブレヒトの他、東独文学・演劇を研究中。

ぼくたちは「革命」のなかにいた

東ベルリン留学グラフィティ

1990年11月30日 第1刷

著 者 芳地隆之

発行者 木下秀男

印刷所 共同印刷

製本所 青柳製本

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話03-545-0131（代表）

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替（東京）0-1730

Printed in Japan

©1990 Takayuki Houchi

ISBN4-02-256226-9

定価はカバーに表示してあります

目次

◆ぼくたちの顔ぶれ

プロローグ ヒストリカル・ジョーク……………11

第一章 壁のある街

DDRは恥ずかしい国か?……………18

連帯はアジア社会主義国の友と……………23

バルトロモイス教会にて……………29

女子高生アネットの政治意識……………35

試験科目はブレジネフ自伝……………43

ヤパーナーの悲しみの日……………56

働けば自由になる、か?……………62

第二章 崩壊の序曲

「中国は正常に戻った」……………72

あら、ブダペストから帰ってきたの？……………80

大脱走……………87

マス・プロテスト……………93

第三章 革命のあとに

祭りがすんで……………102

チャウシェビッツ……………113

カンボジアのマリー……………123

エコロジカル・コミュニスト……………133

第四章 統一ドイツがやってくる

投票前夜……………140

大ドイツの影……………153

第五章 幻滅と希望と

ゴルビーの上等なスーツは許せない……………	170
日本たたきを食い止めた……………	182
ポーランドは「団子より花」……………	189
ネオ・ナチも私たちの子供なのです……………	203
DDRマルクお別れパーティー……………	213
幻滅、希望、そして幻滅、そして希望……………	227
国際旅団のつくりかた……………	237
◆あとかぎ……………	247
◆年表	

装幀 亀海昌次
装画 小沼隆一郎

ベルリン中心図

WEST(西)



Sバーン(電車)

シュペレー川

国際会議場

参議院

ブラシデツブルグ



ポツダム

ベルリン・フィルハーモニー

動物園

ランツグーテン



カールス・ゲイルヘルム記念教会

スライマー・バゼン

ベルリン工科大学

フー駅

ケーザム通り

ぼくたちの顔ぶれ

▼東ドイツ

- モンティ(会社員 新フォーラム・メンバー)
ダニエル(フンボルト大学中国語学科)
マヌエラ(女子高校生)
ラーヘル(女子高校生)
キム(日本語通訳・翻訳家 女性)
アネット(女子高校生)
カトリン(女子高校生)
ゼルゲ(小学生 女の子)
カヤツ(アネットの父)
ゲーディク(フンボルト大学ドイツ語教師 女性)
ウーリヒ(ホテルレストランコック)
アンチエ(フンボルト大学付属図書館職員 女性)
ジャクリーナ(フンボルト大学日本語学科大学院)

- カトリーナ(フンボルト大学日本語学科)
ヴィーラント(フンボルト大学日本語学科)
ホイケンカンフ(フンボルト大学文学部教授 女性)
トーマス(フンボルト大学法学部)
クリスチアン(医学生)
ライナー(芸術アカデミー職員)
ペーベル(演劇学者 ライナーの奥さん)
ミヒャエル(テレビディレクター)
レキーン(ホテルウーマン)
ハインツ(研究者)
シュテファン(出版社勤務)
ハルトムート(フンボルト大学法学部)
ベアー(元学生寮寮長 女性)
ガイスラー(現学生寮寮長 男性)

ベアーテ(フンボルト大学ドイツ学科)

▼ソ連

ターニャ(フンボルト大学ドイツ学科)

カーチャ(フンボルト大学ドイツ学科)

イーナ(フンボルト大学ドイツ学科)

ラリサ(フンボルト大学ドイツ学科)

ナターシャ(フンボルト大学短期留学生)

ナテラ(フンボルト大学短期留学生)

マーシャ(フンボルト大学短期留学生)

スウェータ(フンボルト大学短期留学生)

▼ポーランド

ヤニチカ(フンボルト大学ドイツ学科大学院)

ハリナ(パントマイム役者)

ルチナ(フンボルト大学ドイツ学科)

ハンナ(フンボルト大学ドイツ学科)

イヴォーナ(フンボルト大学ドイツ学科)

マーレク(フンボルト大学ドイツ学科)

▼ブルガリア

クリスト(フンボルト大学経済学部大学院国際貿易

専攻)

▼ハンガリー

マリアン(フンボルト大学ドイツ学科)

▼フランス

クロディーン(フンボルト大学短期留学生)

ソフィ(フンボルト大学短期留学生)

▼スペイン

アントニオ(フンボルト大学短期留学生)

▼西ドイツ

マチアス(自動車修理工)

▼キプロス

アンドローラ(フンボルト大学ドイツ学科)

▼アメリカ

ブレット(フンボルト大学短期留学生)

▼キューバ

ヘンドリック(大学教授)

▼アンゴラ

ファルカオ(フンボルト大学法学部)

▼ベトナム

ホア（フンボルト大学大学院化学専攻）

ホアン（フンボルト大学ドイツ学科）

トウイ（フンボルト大学考古学専攻）

ハン（フンボルト大学化学専攻 女性）

▼カンボジア

リダ（電気専門学校）

マリ（看護婦専門学校）

▼モンゴル

ジョニー（フンボルト大学生物医学専攻）

ボルト（フンボルト大学芸術学部）

▼北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）

リー（フンボルト大学ドイツ学科）

チェン（フンボルト大学数学専攻）

ツォン（フンボルト大学ドイツ学科）

▼中国

張（フンボルト大学哲学専攻）

▼フィリピン

リッチー（フンボルト大学ドイツ学科）

▼ミャンマー

レイ（フンボルト大学医学生）

東ベルリン留学グラフィティ

ぼくたちは「革命」のなかにいた

ブローグ ヒストリカル・ジョーク

「とにかく国境まで行ってみよう」とぼくたちが決めたのは、一九八九年十一月一〇日午前二時頃であつた。

先程までフンボルト大学学生寮の休憩室のテレビには、西ドイツのARD（西ドイツ放送連盟）のニュースが流れ、そこには東西ベルリンの通用門のひとつ「チェックポイント・チャリー」まで半信半疑でやって来た東ベルリンの若者の姿が映し出されていた。

ぼくたちは早速外に出た。東ベルリンで医学を学ぶミヤンマー（ビルマ）のレイが運転する車に乗り込んだのは、ブルガリア人で経済を学ぶクリスト、ドイツ学科専攻のソ連のターニャ、そしてぼくの四人であつた。

チェックポイントまで約一五分。壁が開いたというのは本当だつた。

東西ベルリン国境は東ドイツ市民であふれ返っている。ここ数カ月、特に強くなった「旅行の自由化」という市民の要求が、ベルリンの壁に穴をあけたのだ。昨日、SED（社会主義統一党）政治局員のシャボフスキーが「東西ドイツの通行を自由にする」と発表したのは嘘ではなかった。

チェックポイント・チャリーの前は喧騒が渦まいていた。喜びと驚きで言葉にならない叫び声をあげ、ガッツポーズをとる若者、声も出ないほど興奮してただ一方に向かって歩くおぼさん、おそろく両親から夜中に起こされて連れて来られたのであろう、眠い目をこすりながらいま自分がどういう状況にいるかまだ分かっていない子供たち……、同じ状況のもともども、人間の反応は様々だ。

しかし、何よりもほくが驚いたのは、国境のパスポートコントロールの顔だった。ニコニコしているのである。ほくがパスポートを差し出そうとすると、彼は顔をさらにほころばせて、ほくのパスポートをさえぎり、「今日は例外、どうぞ」と言う。パスポートにスタンプさえ押さないのだ。とどめは「さようなら、楽しんできてね」の一言。

普通ならこれくらい言葉、他人からかけられても驚くことはない。だが、つい先日まで、ほくたちが東ベルリンから西ベルリンへ行く時、そして再び東ベルリンに帰ってくる際、いかに彼ら国境検査官にいじめられてきたか。人の鞆や入れ物という入れ物を全部ひっくり返して、早口のドイツ語でまくしたてる。こつちが返答できないでいると、さらに待ってましたとばかりの質問攻め。理不尽な質問を切り抜けた後で、ほくは彼らの前に散らばった物（大体それらは西で買った本や男性化粧品など）を自分で再び鞆にしまう。その間、当然のことながら彼は口元に微笑のかけらも見せなかったのだ。

「この変わり様は何だ！」

いまやさしい一言を吐いた検査官は、一カ月前に「国内持ち込み禁止だ」と言って、ほくから『南

ドイツ新聞』と『シュピーゲル』を取り上げた奴ではないか。四週間以内にこの国から出て行けば返してやる、という紙切れをぼくはいまも持っている。

歓喜、驚愕、戸惑いの顔、顔、顔。その人たちの渦の中で、ぼくもまったく興奮していた。しかし、ぼくは頭の中をこねくりまわした。いま目の前で起こっていることを、どう判断すべきか。

「レボリューション」「コミュニズムの崩壊」「民主主義の勝利」「冷戦からの脱却」……、違う、どれも違うのだ。

いまのこの状況に見合う言葉が見つからない。人間の語彙なんて所詮限られている。ぼくはそう思い、混乱は混乱として受け入れてしまえと開き直った。

ぼくたちはチェックポイントの前の大通りに車を置き、星条旗はためくアメリカ占領地区から西ベルリンに入り、地下鉄で中心街へと向かった。時計は午前三時を回っていた。

ターニャはしばらく足を一步も動かさなかった。

「エーッ、嘘だ。これは何なの！ 見たくない！」

それから彼女は両手で、自分の目をふさいでしまった。ぼくたちは、西ベルリン最大のデパート「カウフハウス・デス・ヴェステンス」という、日本語に訳すと「西側諸国のデパート」といった、これ見よがしの名のついた建物の最上階の食品売り場にいた。

やわらかい照明のもとで輝いて見える数え切れないほど種類のあるソーセイジやチーズ。絵の具入

れのようにコントラストのとれたフルーツの群れ。二重三重に美しく包装されたインスタント食品。そしてアジア、アフリカの名産。ちょっと見てくれの悪い野菜は無農薬なので、普通のより少し高い。いま東ベルリンで買える野菜果物といえ、せいぜいキャベツ、タマネギ、ジャガイモ、リンゴくらいか。

しかし、ターニャはその落差（つまり東と西の）だけにショックを受けたのではなかった。

五年前、彼女は東シベリア地方の人口一〇〇万人弱の都市クラスノヤルスクから東ドイツに留学してきた。彼女をまず最初に驚かせたのは、東ドイツのモノの豊富さだった。東ドイツはこんなに豊かだったのか。それから五年後、それを数十倍上回るモノの前に彼女はいるのだ。「もしママをここに連れて来たら、びつくりして死んじゃうわ」。真顔で彼女は冗談を言った。

ちなみに、ぼくとレイは西側の人間なので、いつでも西ベルリンに出られる。ターニャとクリストは自国のソ連、ブルガリア政府から許可がおりないため、出られなかった。だから、ぼくとレイはこの二人のための、さしずめ添乗員みたいなものだった。ぼくらはターニャとクリストに、時間の許す限りいろいろなものを見せたいと思った。彼らの知らなかった世界の一部を。

「オレ、二〇西ドイツマルクぐらい持つてるから、何か買えよ」

文房具売り場でレイがターニャに言った。二人は恋人同士で、学生寮で同棲している仲である。ターニャは恥ずかしがりながら、グリーンやイエローの蛍光ペンやその他文房具をひとつひとつ丁寧に手に取り、ゆっくりそしてじっくり見ている。おそらく初めて手にしたのであろう商品を眺めては、